

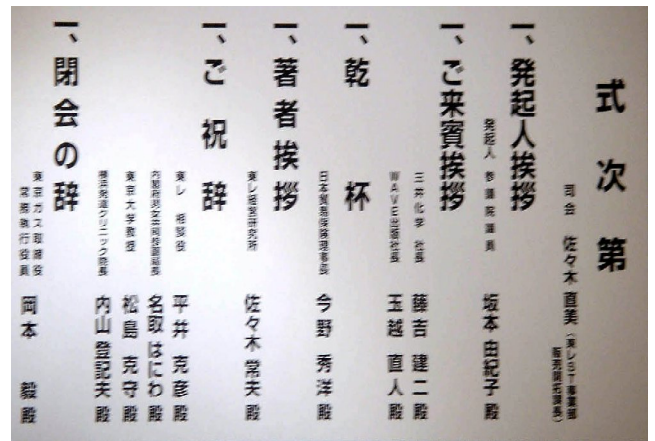
「佐々木常夫君の出版を祝う会」報告

2006（平成18）年6月21日

於：ホテルオークラ東京・オーチャードルーム

「佐々木常夫君の出版を祝う会」が先日開催され、各界から約300人の出席者を得て大盛会でした。発起人は、松島克守・東大工学部教授（学生時代友人）、渡辺裕泰・早稲田大学院教授（浩志会友人。元国税庁長官）、坂本由紀子・参議院議員（浩志会友人）、児玉駿・日通総研社長（中国研究会友人）及び斉藤典彦・東レ㈱取締役（東レ同期入社友人）の錚々たる顔触れでした。

注）浩志会： 官民の中堅幹部人材育成のための勉強会。官庁は各省庁、民間は各業界一社ずつから若手課長クラスを集めて、日本の将来を担う人材を育成しようという趣旨で、1982（昭和57）年に発足した財団法人。現在は1,000人を超す大きな集団となっている。



附中13期は少し早めに集まって欲しいという常夫君からの事前の伝言もあり、午後6時過ぎには出席予定の11名全員が顔を揃え、開会10分前に早々と会場入りしました。テーブル卓を完全占拠のうえチビチビと酒精飲料を摂取し始めましたが、その様相はさながら「本席をお借りした同期会」の感がありました。

もっとも、常夫君からのお誘い文には「少し早めの納涼会のつもりで参加いただけませんか？」とありましたから特段問題は無かったものと思われます。



程なく、佐々木直美（東レ後輩）さんという麗人課長さんの司会により午後6時30分の定刻キッカリに祝賀会が始まりました。同姓ではあるものの主賓とは全く関係が無いことをしきりに強調する姿が妙に印象的な彼女ではありました。

初めに、発起人を代表して坂本由紀子参議院議員が挨拶、続いて藤吉建二・三井化学社長、そして今回

の出版の切っ掛けを作ってくれた玉越直人・WAVE 出版社長からの挨拶がありました。常夫君は玉越社長について、「年代はずっと若いが、人生や社会に対するスタンスが自分と共鳴するところがあり、生涯の友人になれるのではないかと感じている」と著書の中で述べています。

この様な関係もあってか、玉越社長は時に感極まりながら今回の出版に至った経緯等を紹介してくれました。初めは渋る常夫君に「世の中の重荷を背負っている方たちに勇気と希望を与えるため本を出版してみませんか」と勧め、更に「なんとと言っても、佐々木さんの家族のために本を出すべきです」と言って落とされたことでした。

続いて、今野秀洋・日本貿易保険理事長発声による乾杯となりましたが、同氏は「おめでとうと言うべきか他の何か適当な言葉とすべきか迷った」と前置きし、結局、諸々感謝の意を込めて「ありがとう」で乾杯の発声を決めてくれました。これには出席者全員が大いに賛意を表したところでもありました。

次に著者挨拶の後、家族全員が舞台に勢揃いし、常夫君から順次紹介された後に一言ずつスピーチがありました。後で聞いたところでは、著者挨拶は別として、家族全員で舞台に上がる予定はなかったとのことですので、どなたかスタッフの方の気配りであった模様です。



最初は奥さんの浩子さんでしたが、場内にはやや緊張した空気が流れていました。その中を浩子さんは殊の外しっかりとした口調で次の様に切り出しました。

「皆さんこんばんは。私が佐々木のパートナーの浩子です。この人はいつも明るくプラス思考で、私はいつも暗くてマイナス思考で、性格はあらゆるところで反対で、よく今まで一緒に暮らしていたものだ自分を褒めてやりたいと思っているくらいです」。ここで場内の緊張の糸が一気に切れて爆笑の渦に包まれてしまいました。

「今度の本を出版すると言う時、私はその本の題名を「ごめんなお父さん」としようと言ったのですが、WAVE 出版の玉越さんから、それは2作目に貴女が書きなさいと言われました」。場内は割れんばかりの拍手と爆笑の渦で、スピーチは何度も中断してしまいました。

「私は主人の話によると43回も入院したそうです。主人もよく数えたものですね。この人はなんでも記録する癖があるようです。会社の人もこんな上司を持つと大変だと思いますけれど」。ここで完璧にスピーチは中断、拍手と爆笑が鳴り止みませんでした。

「今は、しみじみ生きていて良かったと思っています。今日は本当にありがとうございました」。苦しかったこと辛かったことにユーモアをまぶして笑いで表現することのできるリアル大阪人の真骨頂を見た思いがしました。まるで夫婦善哉か吉本新喜劇の原点の様でした。佐々木家の家庭環境を事前にある程度知らされていた我々は、この一言で気持ちがどれだけ楽になって癒されたか分かりません。

続いて長男の俊介君が紹介され、彼がどのような反応を見せるのか会場の全員が固唾を呑んで見守っていたところ、ごく自然に振る舞って次男の啓介君にスピーチを譲り、これもまた会場には印象良く受け止められていました。

啓介君は、「**最初この出版の話があったときは、正直言って反対でした**」と。佐々木家の内情を全国に暴露してしまう訳ですから、これは当然のことであったでしょう。また、この青年らしい正直な一言が会場の雰囲気爽やかにしてくれる効果を生みました。家族の一員としては若干問題ありとも云える今回の出版について、全員が一致して賛成したとなると余りにも出来過ぎていると云う印象を拭い切れませんから。

それよりも、約300人の出席者を前に、さほど上がった素振りも見せずに整齊とスピーチをする啓介君の姿には感心させられてしまいました。

最後は長女的美穂子さんでしたが、出席者に礼儀正しく謝意を表しての彼女のスピーチも是また立派なものでした。彼女も余り上がった様子もなく、浩子さんに関するエピソードを一つ紹介してくれました。

「**母親が、自分はもう長くはないのだからお墓を見に行きたい、と云うので霊園を見に行ったことがありました。そこはとても景色の良い場所で、母親もすっかり気に入った様子でしたが、その時に母親が言った言葉は「あっ、ここはいいわね。ここなら近いし私もお墓参りに来やすいし！」**」この時点で、お墓に先に入るのは自分（母親）ではなくて、お父さんの方だという風が変わってしまったものの様です。

何れにしても今回のこの席に家族全員が揃って出てきてくれたことは意外でもあり、また祝賀会の大成功に繋がった所以でもありました。一人でも欠けていたらそれなりに心に引っ掛かるものがあったのではないのでしょうか。

それにもう一つ、（我々附中13期の同期生も含めて）今回の出席者は皆さん心豊かで暖かい方々であったとの印象が強く残りました。これは常夫君の人柄に引かれた人々であったからかも知れません。



祝賀会の引き出物？は今回の著書でしたが、翌日早速読ませて貰いました。常夫君のこれまでの中味の濃い壮絶な半生の一端を垣間見た感じですが、それに比べて淡雪の如き我がデタラメ半生を思うとき、これからはひたすら自照自戒の日々を送らねばと強く反省したところでありました。

今回は、いつもの在京・不良家の子女に加えて、京都の天野殖君や山形の三浦（江尻）成子さんも出席してくれました。従って、祝賀会がお開きになってもそれでハイさようならとお別れをする訳にはいきません。

ホテルオークラから徒歩数分の店で二次会となり、横柄な物言いをする店員に一同ムカツキつつもこれを完全シカト、素晴らしい祝賀会の余韻に浸りながら楽しく飲みました。



午後10時を過ぎて一応解散となったのですが、地下鉄・神谷町の入口付近で不良家の子女が「もう一軒行きましょう！」。慣れているとは云えいつも臨機応変の対応を迫られる早坂巧藝社料飲部はやむを得ず近場の居酒屋に当たってはみたものの、何れの店も「ラストオーダーを過ぎました！」。

やむなく辿り着いた先はコーヒーショップでしたが、ここには酒精飲料はなく、コーヒーやアイスクリームで「仕上げた」のでありました。そしてこの店も午後11時の閉店となり、蛍の光に送られながら追いつ出されてしまいました。

今思い返してみても今回の祝賀会の素晴らしさや場内の暖かさが蘇ってきます。このところの早坂巧藝社は典礼部関係の案件が多く、気持ちが少し沈みがちになっていましたので特にその思いを強くしているところです。

昭和30年代後半、心のともしびと云うラジオ深夜番組で「心に愛がなければ、どんなに美しい言葉も相手の胸に響かない」と云うのを繰り返し聞いたものです。今回の皆さんの挨拶、常夫君の言葉、家族の方のスピーチ等々、畢竟、これであったのかなと合点がいつているところです。

